
デュアル・シュール

西崎想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デュアル・シユール

【Nコード】

N4377Z

【作者名】

西崎想

【あらすじ】

ニューヨークの裏通りで出会った、クラフトとジーン。彼らは、世界崩壊の時が迫っていることを知っていた。戦闘時と、普段とで、態度が急変してしまう、クラフト。マフィアの娘のジーン。そんな二人が、世界を救う!?

プロローグ - 崩壊のカウントダウン -

西暦2091・ニューヨーク。

繁華街、裏通り。

ここは、浮浪者、酔っ払い、不良、など、気持ちの宜しくない、者たちがはびこっていた。

その、もう一つ下の、階段を降りたところにある、広場。

その一角に、ポツンと、テーブルに布をかけてあるだけの、簡単な店構えに、一人の男がいた。

彼は、どこか暗い表情の中に、一筋の光明が見える。

その男は、誰かを待っていた。

誰？

それは、その男本人にだってわからない。

男は、長い布……ローブを身にまとっていた。

きやつきやつ

何人かの、女の子たち、高校生が団体で通りかかった。

「ねえねえ」

その中の背の低い女の子が、ローブの男を指さして、

「あれ、占い師ー？」

「えー？なんかこわあ〜い」

「流行ってないんじゃない？」

「いっいっい」

きやつきやつ

そう言いながら、女子高生たちは去って行った。
男が待っているのは、彼女たちではないようだ。

- 今日も、またダメか？

そう、男は湿っぽく思っていた。

その時だった。

カッカッ……

ヒールの音を響かしながら、一人の女が歩いてきた。

その女は、この通りには、おおよそ似つかわしくない、綺麗な姿をしていた。

女は、男へ近づいて行く。

そして、前まで来ると、歩みを止めた。

「貴方、占い師？」

「……ええ」

男は、ぶつきらばうに、それだけ言った。

「私のこと……占ってくださいさる？」

「……それが仕事ですから」

じつと、手相を見る、男。

- この人、変わってるな……。

そう思いながらも、

「恋愛運が良いですね」

ほとんどでたらめに、男はそう言った。

「まあ、ほんと?」

その割に、女は、良い反応をした。」
そして、

「その、水晶玉。使わないの?」

そう言った。

男は驚いて、女を見た。

「ねえ、どう?」

その女の角度からして、それは見えない角度にあったのだ。

・占つてみるか……。

そう思い、男は水晶玉を机に置いた。

……!?

「う……」

男は、そのイメージに眉をしかめた。

「ねえ、どう?」

「……」

男は一息ついて、

「世界は、崩壊に向かいます」

「へえ……? 怖いわね」

「私は貴方を、待っていました」

「あら、ほんと?」

女は少し笑みを浮かべた。

「私と……一緒に……来てくださいます?」

「あら? ナンパ?」

男は下を向いた。

そして、商売道具をしまい出した。

「いかがです?」

その女は、男にそういわねると、

にやあくと、笑い、

「いいわよ」

そう、言った。

クラフトとジーン

「俺はクラフト。君は？」

「私？うん」

何か躊躇している女。少し考えて、

「いいわ、私はジーン」

「ジーンか、よい名だ」

そうクラフトが言うと、

「本当？そんなこと言ってくれたの、貴男が初めてよ」
クラフトは、そういわれると、下を向いた。

「貴男、もう、その布、取っちゃいなさい」

ジーンは、そういうや否や、クラフトのローブに手をかけた。

ばさっ！

「……」

「ああ、結構いい男じゃないの」

クラフトは、ローブの下の姿をあらわにされた。

服は、ヨレヨレのジーンズと、Ｔシャツ。髪は少し伸びていて、黒い。180？くらいありそうな身長と顔つきは結構いい男だった。

「なんか、良い服でも来たなら、もっといい男になりそうね」

そんなジーンは、ブロンドの髪とスレンダーな体をしていて、その体型をフルに生かした、ピチツとした服を着ていた。

「そうね、私が買ってあげる」

そういうと、ジーンは、クラフトの腕をつかんで、町へ繰り出した。

「どこなんて、どう?」

そう言っつて、ジーンが立ち止ったのは、ブランド品が並んでいる、見るからに高そうな店。

「入るわよ」

そういうと、ジーンは、店の中へ、

「いらっしやいませ」

店内は明るく、店員は、丁寧に斜め45度に身体を曲げてお辞儀をしていた。

「貴男のお好みは?」

「……俺は」

そういうと、クラフトは考え込んでしまった。

「あら、貴男優柔不断? いやあねえ」

ジーンはそんなクラフトを見ると、自分で、パパッと服を選んだ。

「どう? こんなのは」

「そうだな……」

「じゃあ、これは?」

「……もう少し、かっこいいのが」

ジーンははあーっと息を吐くと、

「ああんあなた、優柔不断のくせに、選り好みするの？もおう」

「……いや、そういうわけじゃあ」

そう言われると、クラフトは口をつむんでしまった。

「あら？あ、ごめんなさい？」

「いや……君が選んだのでいいよ」

「そおう？」

じゃあ、ということ、ジーンが服を選んだ。

「こんなのは？……と、良いみたいね」

クラフトの表情を見て、ジーンがそう言つと、

「じゃあ、これ、カードで」

はい、と素早くカードを店員に渡した。

襲来

革の上下にブーツ、クラフトは、満更でもないようだ。それを見て、ジーンはカードを出した。

外に出た二人。

ジーンは、駐車場に来たところで、止まった。

「さ、ここよ」

すると、クラフトは、ジーンに抱き着いた。

ドキツとするジーン。

「ク、クラフト？」

「君は、何を知っているんだ？」

「え？」

「なぜ、俺の所に来た！」

語気を荒げるクラフト。それを聞いたジーンは戸惑った。

「な……なに怒ってんのよ」

「君と会った時から、ずっとつけられている」

「え……！？」

辺りを見ようとするジーン。

「見るな！」

小さい声でしかし鋭く、クラフトは言った。

「君は、銃を持っているか？」

「え、ええ」

「走れ！」

その声に、ジーンは走った。

ダーン！

銃声が響く。

「きゃああー！」

そう叫びながらも、ジーンは自分の車にたどり着いた。

「よしっ！ー！」

クラフトは、銃で応戦しながら、ジーンの所へ、

「ちょ、ちょっと！なあによおう！」

「君の事を歓迎しているんだろっ！」

そう言っつて、クラフトは、ジーンに、

「車のキイだ、開けるんだ！」

「え、えええ！」

ピー

カチッ……

急いで入る二人。

「はやくー！」

その車は、すごい速度で、走り出した。

カーチェイス

車は走り出した。

「どういうこと？……ねえ！」

ジーンはクラフトに聞く……というより、相手に聞きたいのだろ
う。

クラフトは、一回、ため息をつくど、

「俺には、解らない」

「もうっ！」

その時だった、

ガツン！

「きゃあああ！」

車が大きく揺れた。

「あいつら……！」

車で、クラフトたちの車に体当たりをしてきたのだ。

「ちよっとお！なんなのよおう」

ジーンが叫ぶ。

「ジーン！車の運転をうまくしろよ！」

そう言うと、クラフトは窓を全開にした。

「な、なにすんの？」

「こっつ……するのさー！」

身を出るだけ外に出して、拳銃を持つ。その拳銃が火を噴いた。

ガアン………！
ガアン………！

「きゃあああ！」
車体が揺れた。

「しっかり、運転しろ！」
クラフトが叫ぶ。

「なによおう！もうっ！」
ジーンは今にも泣きだしそうに叫ぶ。

相手の車は、その間に、クラフトに銃で応戦。

ダダダダダッ………！

「クラフト！」
「大丈夫だ！しっかり運転しろ」

クラフトはそう言い、銃を構えた。

ガアーン、ガアアーン！

そのうち、道は、山へ。

「右にカーブしてくれ！」
「え、えええ！」

グウン………！

ジーンの反応が遅かった、のが、幸いした。
車がカーブするのが、遅いため、相手の車は対処しきれなかった。

その車はガードレールを突き破った。

そのまま、相手の車は崖の下へ。

「やりい！」

「ふう……良い車だ、なんていうんだ？」

「アストンマーティンよ」

水晶玉

街のカフェテラス。

そこに、クラフトとジーンはコーヒーを飲んでた。

「ふう……ねえ、クラフト」

「……ん？」

何かを言いかけたジーンだったが……、
クラフトはシガレットケースを出した。

「あんた、タバコも吸うの！？もおう」

あきれた調子にジーンが言う。

「仕方ないだろう」

「もおう、アストンマーティンもクラッシュしちゃったしい」

「……ジーン、君はなんなんだ？」

「あ……あの、私ね？……マフィアの父がいて……」

クラフトは、それを聞いて、コーヒーを吹き出しそうになった。

「マ……マフィア……か」

「そ、そうなの、あのね、それでこんな」

「気楽な生活をしていた……か？」

「そ、そうそう、でも、私、知っちゃって……」

「世界滅亡を……か」

ジーンは身を乗り出した。

「私、好奇心旺盛で……ふふ」

「そうか……ふふ」

二人は、少し笑った。

「しかし、どこに世界滅亡なんて事態がくるんだ？」
クラフトは、周りを見回した。

「そうねえ……」

ジーンもそれにならう。

「まあ、知りたきゃ、……これが、ある」

そう言っつて、クラフトが、自分のスポーツバックから取り出したのは、水晶玉。

「それで……なんかわかるの？」

「ああ……」

そして、クラフトは水晶玉に手をかざして、目をつむった。

……

「なにが解るの……？」

そんなジーンの状態も聞こえないほど、クラフトは集中していた。

サアアアア……

……これは

水……？

水の音が……。

なんだ……？

ザーザー……、

滝……？

ここは……アメリカの……。

「ふう……」

そう言って、クラフトは瞑想を止めた。

「なんか、解った？」

「……ああ、しかし……少し……疲れ……」

ふうー……、

ともう一度深いため息をすると、クラフトは寝むってしまった。

ナイアガラの滝

「う……」

クラフトは、少し寝ていたようだ。

「クラフト、起きた？」

「あ……ああ」

のそおっつとしているクラフトに、

「あんたつて、戦闘しているときと、普段と、まるっきり違う性格してるわね。ジキルとハイドみたい」

そういった。

「……俺は、そんな気はないが……」

そういつて、頭をガシガシ掻いた。

「そう、思い出した。あんた、水晶玉で、何か見たんでしょう？」

「あ……ああ、忘れていた。すまん」

ジーンは身を乗り出した。

「それで？どうなったの？」

「ああ、たぶん……ナイアガラの滝に、何かがあるみたいだ」

「ナイアガラ……ふうん」

「それじゃあ、行くか？」

「待つてよ、私のアストンアーティン。ダメになったのよ」
クラフトは、少し考えて、

「電車……」

そう言いかけると、

「はい、ブー。私、市民の暮らし、ダメなの」

「……じゃあ、どうする？」

すると、ジーンが、キャッシュカードを見せた。

「はあい、これよおっ」

電波探知機

「ふわー」

クラフトは眠そうだ。

「あつたわ」

車の販売店に着いた。

「車を、もう一台……か？」

「そうよ、これさえあれば、出来ないなんてことはなんにもないわ」

キャッシュカードをピラピラっつと見せた。

「いらっしやいませ」

「はあ〜い、ウィリアム」

「これは、ジーン様」

「ふふん、何か良い車。ある〜？」

ウィリアムは、慌てて席に通す。

「そうですね」

一時間ほどして、

「いいわ、じゃ、これで」

キャッシュカードを渡すジーン。

「はい、ただいま」

ブウウーン……、

「きゃっほう！」

手に入れた車は、キャデラックだ。

「これは、凄い……」

「ん？なあに？クラフト」

「凄い金持ちだな……とな」

「ふふうん、伊達にお父様の御威光があるわけじゃないわ」

「そうか……」

少し進んだ頃……。

ピーピーピー

何かが鳴った。

「なに？クラフト？」

「そうか……」

何かを取り出すクラフト。

「なあに、それ」

「電波探知機。だ」

「でんぱ………なんて？」

「電波探知機。この近くに発信器が付いている」

「な、なにそれ」

「ちよつと、止まれ、ジーン」

車が止まった。

ピーピーピー

鳴り続けている探知機。

「ちよつと、いやだ」

「ここだ」

示したところは、車のエンジンだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4377z/>

デュアル・シュール

2011年12月29日13時52分発行